

徳山工業高等専門学校校外発表論文，学術講演，

著書，分担執筆など

(平成 26 年・9・6～平成 27 年・9・5)

学 位 論 文

アリストテレス「オルガノン」における命題の構造と付帯性の研究

学位 博士（文学）
取得大学 広島大学
取得年月日 平成27年3月4日
高橋 祥吾

本論文の目的は、アリストテレスの論理学に関する著作群「オルガノン」の中で論じられている命題の構造の解明と「付帯性」概念に関する解釈上の問題を解決することである。この考察によって、アリストテレスの考える命題が推論の前提としてどのような役割を担っているのかを明らかにする。そのために、名と述べる言葉に基づく命題の構造を明らかにし、適切な推論を形成するため命題の述語として現れる付帯性の定義の不整合を解消することを目指す。

序論（第一章）においては、考察の前段階として、「オルガノン」各書の相対的な成立順序を確認した。著作の相対的な成立順序は、いわゆる「三段論法」の成立過程についての解釈に依存する。本論文では Barnes に代表される、三段論法はアリストテレスの生涯の最も遅い時期に成立したという解釈に基づいて考察を進める。その結果として、本論文は、問答法における推論とその前提命題についての考察が中心となる。そして、この推論と前提命題が三段論法へと繋がる可能性を模索することになる。

そのための本論における考察は、大きく二つに分かれる。ひとつは『命題論』を中心にした命題の構造の考察である（第二章～第四章）。もう一つは、前提命題の述語として現れる付帯性の問題である。

まず命題の構造について、『命題論』の著作としての役割から、アリストテレスは問答法において命題の対立関係が重要であると考えていることを論じた。この点は、Whitaker の研究に依拠している。その上で、アリストテレスの考える命題の構造が、伝統的な S is P のような構造だと単純に考えるべきで

はなく、名と述べる言葉という二つの論理的に異なる機能を持つ部分から命題が構成されることを論じた。そしてその構造は現代の論理学の命題の構造と類似しているが、しかし本質的に異なることを明らかにし、この違いが、なぜアリストテレスは三段論法において固有名を含む前提を用いることがなかったのかという古くからの問題に対してひとつの理解を与えることを指摘した。

さらに、『命題論』における命題の構造についての考察が、『ソフィスト的論駁』や、『トピカ』における問答法の推論の前提である $\pi\rho\omicron\tau\alpha\iota\varsigma$ と $\pi\rho\omicron\beta\lambda\eta\mu\alpha$ の説明や解釈とも整合することを明らかにした。すなわち、命題の対立関係という観点と推論の前提命題は「ひとつのものにひとつのものを」肯定したり否定したりするものであるという条件を、アリストテレスはどの著作においても重視しているのである。

以上のような前提命題は、アリストテレスの推論においても一つ大きな役割を持っている。それは、推論の必然性（妥当性）が命題の必然性に依拠していると、アリストテレスは考えているということである。現代の論理学では、推論の妥当性はその推論の形式に依拠していると考えられている。アリストテレスは三段論法において、はじめて推論の形式化を行ったと言われているが、三段論法成立以前から推論は必然的に帰結するものであると考えていて、それゆえに形式以外の点に推論の妥当性を求めていることが分かる。そしてその妥当性は命題の必然性によって保証されている。このような推論が三段論法を生み出す起源のひとつと考えられるのである。

そして反対に、付帯性を述語としている命題は、必然的な命題ではないため、妥当な推論には用いられないことになる。また、付帯性が主語として用いられる場合には「付帯的な述語付け」と呼ぶべき場合が存在し、この場合も推論の前提として用いることができない。したがって、妥当な推論を構成する

ためには命題が付帯性を表すかどうかを検証することが重要になる。そして『トピカ』では問答法を通じて、命題が付帯性を表すか、それ以外を表すかを検証する方法を提示している。しかし、付帯性かどうかを決めるために必要な付帯性の定義そのものに問題が存在する。

そこで、『トピカ』の問答法において重要な概念である、定義項・類・固有成・付帯性の四つのものの定義を考察し、その中で付帯性の二つの定義の齟齬、そしてそれについての先行する解釈について考察した。

定義項・類・固有成・付帯性の四つは、排他的で網羅的な関係にある。アリストテレスはその排他性と網羅性に基づいた推論を構成している。この四つについて解釈上の問題として持ち上がっている付帯性の二つの定義は次のようなものである。

S1: ある事物に属すが、定義項でも固有成も類でもないもの

S2: 任意で且つ同一のものに、帰属することも、帰属しないこともあるもの

S1は網羅性と排他性に基づいた消極的定義であり、S2はこの定義だけで付帯性を規定できる積極的なものである。アリストテレスはS2の方がそれだけで付帯性を規定できるゆえに優れた定義だと見なしている。

しかしながら、アレクサンドロスによって、このS1とS2は外延が異なり、S1は満たすがS2は満たさない付帯性が存在することが指摘されている。たとえば白鳥にとって「白」という性質は、定義項でも類でも固有成でもないから付帯性であると言えるが、しかし白鳥は白くなったり白くなかったりするはずはない。したがって、S1を満たすがS2は満たさない。アレクサンドロスはこのような付帯性を「不可分離的付帯性」と呼ぶ。

さらに付帯性についてBrunschwigは、アリストテレスは『トピカ』のほとんどの箇所でもS2に基づく付帯性について論じていないことを指摘する。そして、アリストテレス自身は明言していないが、事実上第三の付帯性に基づいているという解釈をBrunschwigは提示する。その定義S3は次のようなものである。

S3: AがBの付帯性である=AがBに属する

本論文では、問答法の実践の場面を考慮すれば、アリストテレスはこのS3など考えていないと解釈する。問答においては、付帯性が帰属することのみを主張し、帰属しない可能性については述べないことが求められる。S2の定義に含まれる「帰属しない」可能性について述べることは余計なことになるのである。したがって、Brunschwigのような解釈を行う必要はない。その一方で、「不可分離的付帯性」の問題は問答の場面を考えるだけでは解決しない。

そこで「不可分離的付帯性」の問題をより深く考えるために、ポルピュリオスの『エイサゴーゲー』を考察した。まず『エイサゴーゲー』の五つの語は、『トピカ』の定義項・類・固有成・付帯性の四つのものと、共通する部分がありながら、全く異なる意義を持っている。

さらに『エイサゴーゲー』における種差、付帯性、固有成についてより詳しくアリストテレスとの相違を検討した。『エイサゴーゲー』では、S2と類似する定義を採用しながらも、「不可分離的付帯性」の存在を受け入れ、「思考の上で」分離可能であるために「不可分離的付帯性」も付帯性であるという解釈を提示していることを明らかにした。そして、固有成は、「実体的なもの」と「属性的なもの」という二つのカテゴリーの両方にまたがるものと位置づけられている。これは、アリストテレスにはない『エイサゴーゲー』独自の規定である。

その一方で『トピカ』以外の付帯性に関して、『分析論後書』における自体的付帯性について考察した。この自体的付帯性は、伝統的には固有成であると解されてきた。固有成は、(固有成が帰属する)主語と(固有成である)述語の外延が一致するものである。しかし、この自体的付帯性は固有成と同じではなく、主語と述語の外延が一致しない場合も成立する。この付帯性が「自体的」と言われるのは、主語が含まれる類だけに付帯性が属し、その類に含まれないものには属さないという意味で自体的と言われているのである。

さらに『分析論後書』と『トピカ』を比較し、『トピカ』で定義項、類、固有成と呼ばれていたものは、すべて自体性として位置づけし直されていることを論じた。それに加え、『分析論後書』では「固有」という言葉が、『トピカ』とは異なる意味を持っていることを指摘した。

以上の『トピカ』以外の著作の考察を踏まえた上で、Ebertの解釈を追いながら、残されたS1とS2の定義上の齟齬について再考を行った。その結果として、

S1とS2の齟齬は、ある程度は解消可能であるが、解消のためには『分析論後書』において明示的に表れる普遍性と固有性の概念に訴える必要があることを明らかにし、『トピカ』の定義項、類、固有性、付帯性の定義は不完全であると解釈した。そして、この不完全さは、伝統的解釈が述べているように付帯性の定義に齟齬があったと理解すべきではなく、付帯性以外の定義の方に問題があったために生じた問題であると理解すべきだという解釈を提示した。

結論として、アリストテレスは『命題論』において、問答法に用いるために有用な命題の対立関係を明らかにしようと試みている。したがって、『命題論』で論じられている名と述べる言葉による命題の構造は、問答法に適したものである。他方で、この命題の構造は、『分析論前書』においても決して忘れられているわけではない。さらに、現代の論理学とアリストテレスの命題や推論の必然性はまったく異質であることも明らかである。

また、付帯性の定義の解釈については次のように結論すべきである。

①不可分離的付帯性のような伝統的な付帯性理解は、アリストテレスの解釈としては間違っていること。

②『トピカ』において、定義項、類、固有性、付帯性の定義は、不完全であること。

これらの定義を適切に理解するためには、固有性と普遍性という『分析論後書』において見いだすことができる基準を持ち込まなければならない。したがって、『トピカ』における不整合から、『分析論後書』の中で付帯性は、自体性と対置されるものとして位置付けを変えたと解釈できる。

最後に、『カテゴリー』を理解するための著作である『エイサゴーゲー』がアリストテレスの哲学と著しく相違していることは、『カテゴリー』の真作性に疑問を投げ掛けること、そして付帯性を述語とする命題は、推論の必然性に関わることができないことを『トピカ』だけでなく『ソフィスト的論駁』からも補強できる点を指摘した。